

新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第10号

1998.4

平成9年度 新収蔵品

《世界の美術》

絵画

- ◆ J.T. トーロップ
《聖アウグスティヌスの祝福》
1915年 バステル、紙

彫刻

- ◆ E. バルラッハ
《ロシアの恋人たち》
1908年 (1940年鋳造) ブロンズ



バルラッハ 《ロシアの恋人たち》

版画

- ◆ A. デューラー
・《オリーブ山上のキリスト》
《大受難伝》第3葉
1497~1500年 木版画、手彩色
- ・《キリスト捕縛》《大受難伝》第4葉
1510年 (1511年発行)
木版画、手彩色
- ・《7つの同じ編目文様のある組紐文》
《組紐文》6点組のうち第6葉
1505年~07年 木版画

◆ E. マネ

- 《マクシミリアンの処刑》
1868年 (1884年刊行)
リトグラフ、紙



マネ 《マクシミリアンの処刑》

《日本の美術》

日本画

- ◆ 竹内栖鳳 《睡郷》
1930年 紙本軸装
- ◆ 西脇順三郎 《万代橋風景》
1941年頃 二曲一隻屏風
- ◆ 菱田春草 《放鶴》
1904年 絹本軸装
- ◆ 古川靈華 《遺遺》
1904年 絹本軸装
- ◆ 森田沙伊 《髪》
1938年 二曲一隻屏風
- ◆ 横山操 [中央公論] 表紙絵36点
1966~68年 紙本額装



竹内栖鳳 《睡郷》

洋画

- ◆ 河原温 《JAN. 1. 1975》
1975年 ミクストメディア、キャンバス
- ◆ マナブ間部
・《であい》 1980年
・《夜明けの幻想》 1986年
油彩、キャンバス

書

- ◆ 江口草玄 《窟》
1956年 墨、紙、額装

版画

- ◆ 深沢索一
・《薬師寺付近》
1933年 多色木版画
- ・新東京百景《昭和通ガソリンヤ》
1931年 多色木版画
- ・年賀状 1936年 木版画
- ・年賀状 1937年 木版画
- ◆ 『版画』 1933年 白と黒社発行
(一枚摺り込み9作家17点、機械摺り36作家77点を所収)
- ◆ 『詩と版画』 Vol. 8
1924年11月25日 詩と版画社発行
(一枚摺り貼り込み2作家2点、機械摺り14作家所収)

《新潟の美術》

洋画

- ◆ 三輪大次郎
・《睡蓮の沼》 油彩、板
- ・《米を洗う女》
油彩、キャンバスボード
- ・《高原の朝》
油彩、キャンバスボード
- ・《秋の森》 油彩、キャンバス
- ・《苺》 油彩、板
すべて制作年不明
- ◆ 田畑あきら子 《作品》
1966~67年 油彩、キャンバス

写真

- ◆ 蕪木研爾
・《流水シリーズ》4点 1977年頃
モノクロームプリント、カラープリント
- ・《雪原シリーズ》5点 1980年頃
モノクロームプリント
- ・《般若心経シリーズ》4点
1992~95年頃 カラープリント
- ・《炎城》2点 1990年頃
モノクロームプリント

工芸

- ◆ 吉田醇一郎 《飾り衣桁》
1938年 漆工

《野外彫刻》

- ◆ 竹田康宏 《Under the leaves 97D
Nagaoka "Do you love me?"》
- ◆ 舟越直木 《夏の夜》
- ◆ 青木野枝 《亀池・蓮池》
- ◆ 松井紫朗 《Voice-Scope》

- ◇ 亀倉雄策のコレクション
美術品・蔵書一括

「工芸のジャポニスム」展について

あるいは、この展覧会にサブタイトルがつけられるまで

平成10年4月17日(金)～5月24日(日)

「工芸のジャポニスム」展を開催するにあたり、サブタイトルを考える必要があったわけだが、これが案外と難しい。大体「ジャポニスム」というもの自体が、美術史上に登場してくる「～派」「～主義」「～イズム」の中で明解には説明しにくい、特異なものだからである。ジャポニスムはその名のとおりにJAPON+ISMEが組合わさったもので一般的には「日本主義」と訳されるが、内容的には19世紀後半から見られる日本芸術がヨーロッパの様々な分野に影響を与えていった現象全般を総称している。ここまでは良いのだが、定義としてこれ以上踏み込もうとして、例えば、いつからいつまでどのように誰が興したもので、どのように終焉を迎えたのかといった詳細な内容にまで立ち入ろうとすると、おそらく人それぞれに様々な考え方や疑問が生じてくることは想像できる。こういった状況をジェネヴィエヴ・ラカンブル女史がジャポニスム研究においてその受容を4段階に類別し、さらに高階秀爾氏は発見、採用、同化、創造の古典的過程であると示した。(註1)



複製文水壺 クリストフル社
 フイエークリストフル美術館
 © Hervé SAINT-HELIER/HPSH

1. 折衷主義のレパートリーのなかへの日本的モチーフの導入。これはあらゆる国、あらゆる時代の装飾的モチーフに、他のものを排除することなしに新たに加わったもの。

2. 日本の異国的および自然主義的モチーフの選択的模倣、特に早い時期の自然主義的モチーフの同化。

3. 日本の洗練された技法の模倣。

4. 日本美術の中に見られる原理と方法の分析。

「1」は具体的に言うとそれまで流行していたシノワズリ(中国趣味)や中東的な折衷様式の中に日本趣味的要素がそのままの形で入ってくることであり、「2」は日本的要素のみになることである。ファイン・アート(一般に言う「純粋芸術」を示す)の面から言えばラディカルな意味でのジャポニスムというものが「3」・「4」の段階を示していると考えの方が一般的であろう。浮世絵が印象派の作家に与えた影響、それは俯瞰や構図の面白さ、大胆なデフォルメといったものが表現上の技法として流用、あるいは応用されていった事から考えても理解できる。しかし、デコラティヴ・アート、つまり工芸を対象とした場合、1の「折衷主義的レパートリーのなかへの日本的モチーフの導入」といったものとは別に、例えば「日本的モチーフの導入」と言った生易しいものではなく、日本美への純粋な興味からくる単純な正に模倣をしていた段階も想定出来るように思える。それは、ジャポニスムというよりむしろジャポネズリ的(日本趣味)であるとも言える。その顕著な例としては、先ほどのラカンブル女史が指摘した山鹿平十郎作《青銅龍文壺》とクリストフル社(1817～現在)制作



複製文飾り棚 エミール・ガレ
 複製高山美術館

の《七宝地にブロンズ装飾付壺》が挙げられる(註2)。この2つを比べると極端な相似といった段階ではなく、むしろ再制作と言う方が相応しい。確かに純然たる模倣はファイン・アートの分野でもゴッホが広重の「名所江戸百景」シリーズの《亀戸梅屋敷》を模した《花咲く梅の木》等の例が知られており、比較的見受けられる行為ではあるが、その模倣は画家にとっての絵画的実験としての意味合いが強く、言わば研究的側面が多分にあるのに対して、工芸や装飾芸術においては前述の通り、目

(註1) Genevieve Lacamble, "Les milieux japonisants a Paris, 1860-1880" Japonisme in Art, op. cit., p.43 (高階秀爾訳)
 高階秀爾「ジャポニスムの諸問題」
 国立西洋美術館学芸課編「ジャポニスム展」
 図録 1988年 東京 p.13

(註2) ジュネヴィエヴ・ラカンブル
 「19世紀におけるジャポニスムの源泉」
 国立西洋美術館学芸課編「ジャポニスム展」
 図録 1988年 東京
 pp.22-23

新しさからくる単なる模倣という印象が強い。こういった模倣が頻繁に行われていたことは、日本美術の愛好家で日本美術に詳しいサミュエル・ビングが自らが編纂した『藝術の日本』の序論の中で「盲目的な猿真似や恥ずべき模造品を生み出す手助けとなるものは一切避けて行かねばならないだろう」（註3）と警鐘を発していることから想像できる。

しかし、それを単なる安易な模倣と切り捨ててしまうことには若干の抵抗がある。そこには日本美への探求といった美術史的な側面とは性質を異とした別な意識が存在したのではないかと思うからである。一般に「イズム」というものは美術史の枠組の中でのみ用いられ、それが実際の鑑賞者や作品の購買層までも含んだ現象として語られることは少ない。しかし、ジャポニスムという

「イズム」はその当時の社会や大衆をも巻き込んだ、ひとつの流行と言って良い希有な例と考えられるからである。その最たるものが工芸を始めとする装飾美術の分野であった。なぜここまで純然たる模倣が行われたのか、それは、日本の美術品の再制作、あるいは単なる流用と言ってもおかしくないものを鑑賞者や実質的な購買者は愛したからに他ならない。さらに、その購買層の多くは産業革命以降、19世紀のフランス社会において新たに誕生した中流階級層であった。彼らはそれまでの王侯貴族が愛した贅沢品を好まず、いわゆる「近代」に相応しい全く新しい何かを求めていた。そんな中、今まで目にする事の無かった遙か極東の国からそれまでの西洋美学とかけ離れた美術と遭遇することになったわけである。それらの品々は彼らにとって新鮮であり、正に心から魅せられたのである。やがてそれは流行していくこととなる。

「ジャポニスム」あるいは「ジャポネズリ」と言われる作品の中には正に完全な模倣や、《セルヴィス・ルソー》の皿に見られるようにまるで普段から使用している食器にありのままの『北斎漫画』を写したと思えるもの、西洋造形に日本のアレンジを加えたもの等、ありとあらゆる方法が用いられ、工芸におけるジャポニスムは正に百花繚乱と言って良い。その意味では、これ程までに純粹に無邪気に日本美への憧れをもって表現された例は少なく、また愛された例は少ない。そして、それは一部の美術に携わる者だけではなく、鑑賞者や一般の購買層までも虜にし、その受容はジャポニスムを経て一般に言うアール・ヌヴォーまでも結果的に生み出すことになった。正に世紀末ヨーロッパの、そしてそれ以降の装飾美術を大きく変容（メタモルフォーゼ）させた出来事であったと言えるのである。

純粹な日本美への憧れと西洋人自らの装飾芸術の変容、この2の要素が浮かび上がった時、サブタイトルの方向がどうやら見えてきたというわけである。

（美術学芸員 藤田裕彦）



京都を主題とした楕圓
クレイユ・モンドロー社
オルセー美術館 © Photo RMN/Jean



菊花文花瓶 エミール・ガ
ランシー美術館



魚に鱗文圓 コペンハーゲン
1897
ベルリン工芸美術館

（註3）サミュエル・ビング（小林利延訳）
「1 序論」サミュエル・ビング編『藝術の
日本』東京 美術公論社 1981年 p15



ロケット アントワース・タール
ファリス工務 オルセー美術館
© Photo RMN-Reversment Orsay

自分の見かた、鑑賞の楽しみをみつけよう!

子どものための美術展 '98

目で、からだで、こころで見る。私の見かた、感じかたで

平成10年7月5日(日)~8月20日(木)

もっと対話したい! 関わりたい!

波打ち際にしゃがんで、砂に顔を付けるかのようにじっと動かない子どもや雪が積もったグラウンドに飛び出していく子どもの姿を見かけることがあります。海岸の子どもは、砂の粒の中に小さな貝殻やガラスの粒を見つけ、それを宝物のように持ち帰ります。足元のミクロの世界に入り、じっと見つめ、小さな美を発見しているのです。雪と遊ぶ子どもたちは、真っ白な雪面に足跡をつけ、雪を投げ合い、雪だるまを作り始めます。雪とからだごと戯れ、からだで雪を実感しているのです。このような姿に、鑑賞のヒントがあるようです。子どもたちは、大人とは、別の物との対話、関わり方をしているのです。では、美術館は、もっと対話したい、関わりたいという子どもの欲求に応えてきたでしょうか。

私の見かた、感じかたで

そこで、子ども向けの展覧会の2回目となる本展では、子どもと作品、そして美術館との関わり方に焦点を当てることになりました。美術館は、海岸や広場や学校と同じく子どもたちの学びの場であり、生活の場であるはず。そうとらえ直した時に、美術館での鑑賞活動の可能性は、大きく開けてきます。

鑑賞活動で大切なことは、表面的で、受け身的な見方ではなく、自分なりの見方です。作品と関わり、見る楽しさを十分に感じるができることではないでしょうか。じっと作品に見入り、その後友達との会話が始まり、展示室を出た時「私のお気に入りの作品を見つけた。」とか「はくも今度、描いてみよう、作ってみよう。」というつぶやきが子どもたちのなかに生まれる。そんな「自分なりの見方、鑑賞の楽しみを見つけだす旅」ができる展覧会、美

術館を目指しています。

具体的には、子どもの見方を広げ、見る、感じる、考える、調べるなど様々な関わり方が出来るようにします。

目でみる

ここでは、写実的な作品、スーパーリアリズムなどの作品により、作者が対象をみつめる姿勢や表現力の強さを感じとることができると思います。また、同じ主題を描いた作品を並べて展示することで、そこに描かれている主題について、作家の個性について見方を深めます。

からだでみる

重い、軽い、堅い、柔らかい、熱い、冷たいなどの感じは、目=視覚だけではなく体の皮膚の感覚や筋肉の感覚で感じるもので目だけではとらえられないものです。素材の質感やマティエール、作品の大きさなどにより五感に働きかけてくる作品により、表現の広がりを体験します。

心でみる・心を感じる

ここでは、特にテーマを「母の愛…抱く」とし、絵画、彫刻、具象と抽象、制作年代などのさまざまな母子像から各作品に込められた作者の思い、願いに気づき、それぞれの表現を深く味わいます。具体的には、作品に描かれた主題を思い出したり、動作化してみることでより深く作品と関わることを経験します。



小磯良平(母子像(A)) 1954年
神戸市立小磯記念美術館蔵

ワークショップ

調べてみる・試してみる

鑑賞した作品について、さらにより深く作品と関わるための支援として、インターネットなどを活用して、「調べる活動」を重視したワークショップや、作品を見て、自分もあの作家のように、または、自分ならこう表現したいという創造の好奇心、意欲に答えるために素材や技法に関わるワークショップを行います。

前回の子どものための美術展では、光の美術・美術の光と題し、光をテーマに作品を紹介しました。今回は、このような全体を貫くテーマはありませんが、各コーナーで子どもたち一人一人が、作品と出合い、美術の世界の広がりを楽しみ、自分で順路を決め、自分で見た、感じたという体験が、これから生涯にわたって続く美の旅の大切な一歩となってくれることを願っています。

(主任学芸員 宮崎俊英)

平成10年度の催し

企画展

- 4月17日(金)～5月24日(日) **日本美への憧憬 工芸のジャポニズム展** 世紀末ヨーロッパのメタモルフォーゼ〈変容〉
幕末から明治にかけての日本の装飾性の強い工芸品は、その技術の高さと意匠の斬新さが評価を受けてヨーロッパに「ジャポニズム」のブームを巻き起こす大きな要因となりました。本展では、当時のヨーロッパの人々に愛好されたジャポニズムの工芸とそれらに影響を与えた幕末・明治の華麗な日本工芸により振り返ります。
- 7月5日(日)～8月20日(木) **子どものための美術展'98 目で、からだで、こころで見る。私の見方、感じ方で**
美術作品は目で見るだけのものではありません。本来は肌で感じる温かさや冷たさ、ザラザラやスベスベなど、また心で感じる悲しみや嬉しさなど、からだ全体を使ってみているはず。この展覧会は、美術入門として、近現代美術の秀作を、自分なりの見方を探しながら、様々な角度から、やさしく楽しく見ていきます。
※8月3日(日)開館
8月4日(月)休館
- 9月5日(土)～10月11日(日) **インサイド/アウトサイド -日本現代彫刻の8人-**
平成6年度より進めてきた野外彫刻の設置計画で作品制作を依頼した作家を取り上げます。最前線で活躍する小清水肇、岡本敦夫、竹田康宏、舟越直木、中岡慎太郎、青木野枝、松井榮朗、前田哲明の8名です。野外と屋内の作品を対照させ、素材や手法の変化に富み、多様な展開を遂げている現在の彫刻の動向を紹介します。
- 10月31日(土)～12月6日(日) **開館5周年記念展「日本の美・間の芸術」** 東京国立近代美術館・京都国立近代美術館所蔵品による
日本の伝統芸術における特色は、「間」の芸術たるところにあります。本展は、二つの国立近代美術館所蔵の日本画の名品により、日本の美の本流である「間」に焦点をあて、「無」の象徴性の意味するところ、近代日本人の美意識を探ります。

所蔵品展

- 平成11年2月2日(火)～3月14日(日) **新潟県立近代美術館所蔵品展 亀倉雄策のコレクション (予定)**
世界的グラフィックデザイナー亀倉雄策(1915-1997・吉田町出身)が集めた美術コレクションを中心に、ポスター等の作品も交えて紹介します。

常設展

〔10月12日(月)～10月15日(木)、3月26日(金)～3月31日(水)は保守点検のため、12月24日(木)～1月4日(月)は年末・年始のため休館します。〕

- 第1期 ■4月1日(水)～7月5日(日)
前期: 4月1日(水)～5月17日(日)
後期: 5月19日(火)～7月5日(日)
展示室1 前期:新収蔵品を中心に 後期:日本画の逸品
展示室2 特集展示 前田常作
展示室3 前期:ジャポニズムの時代
後期:見えないものを表すⅠ ～新潟の作家たち
- 第2期 ■7月7日(火)～10月11日(日)
前期: 7月7日(火)～8月30日(日)
後期: 9月1日(火)～10月11日(日)
展示室1 動物を描く
展示室2 戦後の新しい表現
展示室3 彫刻を遊ぼう!
- 第3期 ■10月16日(金)～12月23日(水)
前期: 10月16日(金)～11月15日(日)
後期: 11月17日(火)～12月23日(水)
展示室1 操と又造
展示室2 大光コレクション
展示室3 前期:見えないものを表すⅡ ～李禹煥〈コレスポندانセ〉
後期:デューラーとその周辺
- 第4期 ■平成11年1月5日(火)～3月25日(木)
前期: 1月5日(火)～2月14日(日)
後期: 2月16日(火)～3月25日(木)
展示室1 新潟の作家たち
展示室2 形をつくる、形でつくる
展示室3 前期:映し出された冬 後期:リトグラフの楽しみ

新潟県民会館ギャラリーでの展覧会

- 10月中旬～下旬(予定) 「新潟の美術」をテーマにした展覧会を予定しています。

野外彫刻と語らう — 屋上庭園から (4)

前田 哲明 《UNTITLED 95=0》



屋上庭園を上りきったところに、前田哲明の作品はたっています。信濃川の方を向いて地面から生えているような五つの形は、植物のような有機的な曲線を空に描いています。またそののびのびとした生命感に満ちた様子は、信濃川河畔の自然やその向こうに見える山々と対話をしているかのようにも見えないでしょうか。

作品は鉄でできています。工業製品の材料としての一面を持つ鉄は「冷たい」「硬い」といったイメージを与えられがちですが、それにもかかわらずこの作品からそのようなイメージは感じられません。それは、作者が火を加えると軟らかくなる鉄という素材に温かみを感じており、なおかつこれを使って生命感を念頭に置きながら表現しているからなのでしょう。また、鉄の持つ重さと、作品を形づくる平らな面とエッジとは、有機的な形を一層際立たせています。

春はその空間に爽やかにそよ風を通しながら、冬は雪を頂き、そして赤錆によって自信のマテリアル（材質感）を刻々と変えながら、この作品はずっと自然を見つめ続けていくのでしょうか。

表紙作品解説 ポール＝エリー・ランソン 《収穫する7人の女性》

ランソンはナビ派の最年長の画家であり、日本びいきで知られていました。この作品の線を主体にした平らな彩色と様式化された表現にもそのことがうかがわれます。デトランプとよばれる、顔料に膠を混ぜて描く日本画によく似た技法にも日本美術の影響が感じられます。女性の衣紋や樹木の揺れるような線にはアール・ヌーヴォー様式がみられ、ナビ

派とアール・ヌーヴォー、ジャポニスムの親和性を示す作品です。

日本美術と装飾美術の画商であったサミュエル・ビングの1895年に開店した画廊「アール・ヌーヴォーの館」の八角形の食堂を飾る壁画連作《仕事をする女性たち》の1点として制作されたもので、ほかに3点がフランスのブリュレ美術館に収められています。



1895年 壁画、キャンバス 130.0×287.0cm(部分)

美術館友の会からのお知らせ

◎会員募集

新潟県立近代美術館友の会では、平成10年度の会員を募集中です。友の会は美術を愛する人が集まり、鑑賞会や研修会、会報発行などの活動を通じて親睦を深め、美術館を支援する団体です。有効期間は平成10年4月1日から翌年3月31日までです。常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引、会報等の配布や研修旅行への参加などの特典があります。

照会や入会のお申し込みは、新潟県立近代美術館友の会事務局にお問い合わせください。

〔TEL 0258-28-4111 友の会 佐藤〕

◎開場式のご案内

工芸のジャポニスム展開場式

4月16日(木)午後2時～
一般公開に先立ち会員の皆様をご招待します。当日は受付で会員証をご提示ください。

◎友の会作品鑑賞会

工芸のジャポニスム展

4月21日(火)午後2時～
会員を対象に解説会を行います。

※各企画展の開場式、作品鑑賞会の日時及び友の会事業の案内は、友の会だより、連報版で随時お知らせします。

利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。

※10月12日(月)～10月15日(木)、12月24日(木)～平成10年1月4日(月)、平成10年3月26日(金)～3月31日(水)は保守点検のため休館します。

■観覧料金/企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)
大学・高校生……200円(160円)
中学・小学生……100円(80円)
※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
新潟県長岡市宮岡町字居掛278-14〒940-2021
TEL.0258-28-4111代 FAX.0258-28-4115

美術連話(10) 「センチメンタル・ジャーニー」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

一月末と二月初めに続けて二回京、大阪へ出掛けた。京都生まれの私であるが、昭和34年に福岡へ赴任したのを機に、京都は次第に縁遠くなって行った。親から譲り受けた家も手放したので偶に帰省してもホテルに泊まるより仕方がない。東山は蹴上(けあげ)のミヤコホテルが好きなので、泊まるときにはなるべくそこに部屋をとるようにしている。

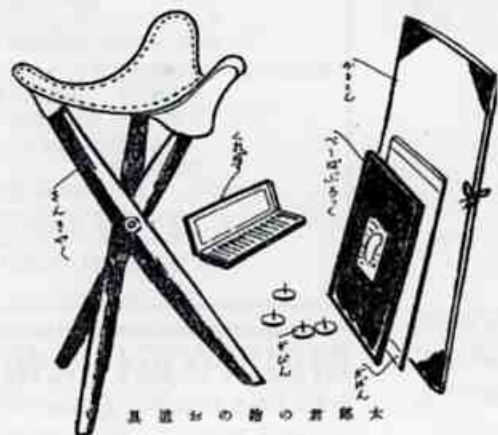
一月はそこで会があったので何かと都合であった。久しぶりに顔を合わせた知友たちに連れられて祇園での二次会へも行った。お茶屋の玄関を入ったところに小さいバーが設けてあって、着飾った舞妓がサービスをする。尤もその夜は老妓が出て来て昔話になった。四十年近くも住んでいないと如何に生れ故郷でも随分と様子が違って見える。薄れた記憶を呼び戻すには若い妓よりも話に手応えがあった。

翌日はすこし早目に三階の食堂で朝食をとった。私は昭和十年代にしばらくこのホテルに住んでいたことがあるので、向いの黒谷から左手の京大の時計台、そしてさらに遠く北山や愛宕山が見晴らせる展望は何とも懐しかった。

そのあと京阪電車で三條から淀川沿いに大阪へ行き、用を済ませると急いでこんどはJRで京都へ戻った。夕方の列車で長岡へ行くことになっており、それまでの数刻を新しい京都駅の見物にあてたいと思ったからである。駅では友人の建築評論家前久夫(まえ・ひさお)さんが待っていて下さった。

用意された図面に一通り目を通してから大きな駅舎を時間の許す限り見て廻った。正面の烏丸口(からすまぐち)から左手の東半分がホテル、また右手の西半分が百貨店になっていて、駅そのものは中間の中央コンコースの部分だけである。

私はこの建物を入れて三つの京都駅を知っている。記憶の中で最も古いのはドイツのハンブルクの駅とかを真似たというもので、わざと左右対称をはずした姿がそう言えばドイツ的であると思ったりした。戦後それが火災で焼けそのあと先年まであった駅ができた。



今度の新駅舎での私の第一印象はとても寒いと思ったことである。巨大な建物が中央コンコースでは四面吹き放しになっているので風も吹こうと言うものである。私は前さんに「家の作りようは夏を旨とすべし。冬はいかなる所にも住まる」と言った兼好を思い出したと話したら、大いに同感して下さった。

西洋での冬の駅は暖いところという印象が強い。プラットフォームへ出れば寒いに決まっているが、駅舎の内は戸を閉めて暖くしてある。冬は寒いと定評のある京都で、大勢が入り出す駅に扉は無用という発想には、徒然草(つれづれぐさ)以来の京都市民の住居観がまだ生きていたと思ったら可笑しかった。

その一週間あと(二月)また大阪へ出掛けた。その時立ち寄った古書店で山本鼎(かなえ)氏が小学生のために「日本児童文庫」(アルス刊)中の一冊として書いた「図画と手工の話」を見付けた。昭和三年に出た綺麗な本である。当時私は小学三年生で、この本は近所の同級生K君の家にあった。こんどゆくりなくも巡り会ってこれまた懐旧の情に耐えず早速読んでみて、それが親や教師のために書かれたものであることを知った。著者自らお両親が読んで、それを囁みかいて子供たちに話してやって欲しいと書いている。山本氏(1882-1946)は洋画家・版画家で、自由画の思想を鼓吹し美術教育に功があった人とさく。

この二度目の大阪行きでは京都駅は列車の窓から裏側を眺めただけであった。降りてみたかったが風邪をひくといけないと思って止めたのである。



日本児童文庫67「図画と手工の話」山本鼎 著 1928年

訂正：

『雪椿通信 第10号』で、下記の間違ひがありました。
お詫びして訂正いたします。

◆P.2 新収蔵品 《日本の美術》 日本画

誤：古川雪華 → 正：吉川雪華

◆P.6 10年度の催し インサイド/アウトサイド
解説の2行目

誤：岡本敦夫 → 正：岡本敦生

◆P.7 野外彫刻と語らう 16行目

誤：自信の → 正：自身の